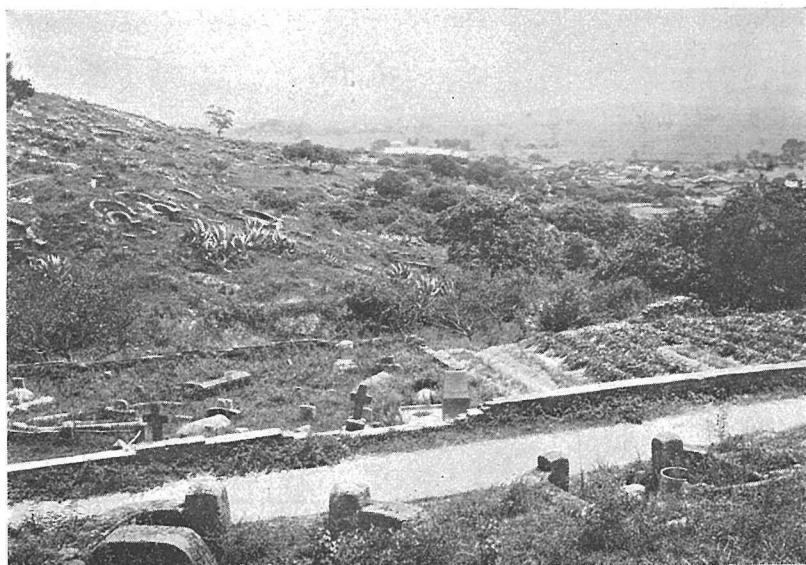


(上) 柔遠驛正廳 (琉球館)
(左) 琉球祠堂



柔遠驛外小萬壽橋附近



福州南郊墓外地(前二基の琉球人墓)

福州の琉球館

米倉 二郎

一

支那の東南海岸は一般に沈降性の特色を有し、リヤス式灣入多く良錨地に恵まれてゐる。しかも南支那海印度洋を通じて南蠻アラビヤ諸國と最も近い距離にある爲、既に唐宋以來海外貿易が盛に行はれて來た。その港には先づ廣州次に泉州が有名である。泉州に居留したアラビヤ商人の子孫と思はれる蒲壽庚は宋末元初に當りて大に活躍し、遂に福建市舶提舉司に任ぜられ、子孫長く泉州の貿易に絶大の勢力を振つて、その極盛期を現じ、マルコポーロやイブンバツード等の旅行者をして、世界最大の港と驚歎せしめ、ザイトンの名歐洲に喧傳さるゝに至つた事は故桑原博士の名著に詳述さるゝ所である。^①

しかしながら、一朝、明の太祖による漢族の攘夷革命

成功するや、元朝と異なり、異民族排外主義をとつて、外國貿易の如きも私に諸藩と互市する事を禁じ、海外諸國は許多しと云つて、その往來を絶たんとした程である。^②殊に前朝に忠勤を抽でた泉州の蒲姓の子弟には仕官する事が禁ぜられたので泉州の繁榮は次第に衰へざるを得なかつた。

しかし四圍の夷狄をして中國を奉ぜしめんとするは漢族の傳統的對外策であるが、明朝も、この例に洩れず、南の眞臘、暹羅、東の琉球、高麗更に我國等に入貢を勸誘した。

琉球は時あだかも三山鼎立の頃で時世を見るに敏であつた中山王察度先づ太祖の招撫に應じ、明の洪武五年(西紀一三七二年、以下括弧内は西紀による)弟泰期を遣し

臣と稱して方物を貢した。これ琉球が支那に通ずるの濫觴である。

明は琉球の入貢に便せんが爲、洪武永寧間二次に互つて閩人各一八姓合計三六姓を琉球に送つた。明史によれば彼等は舟大工であり、又良く舟を操る者達であつた。その出身は福建河口の人が大部分で、この中には老いて後國に歸つた者もあつたらうが、その他は琉球の久米島に定着し、長く、琉球と支那とを結ぶ紐帶となつた。

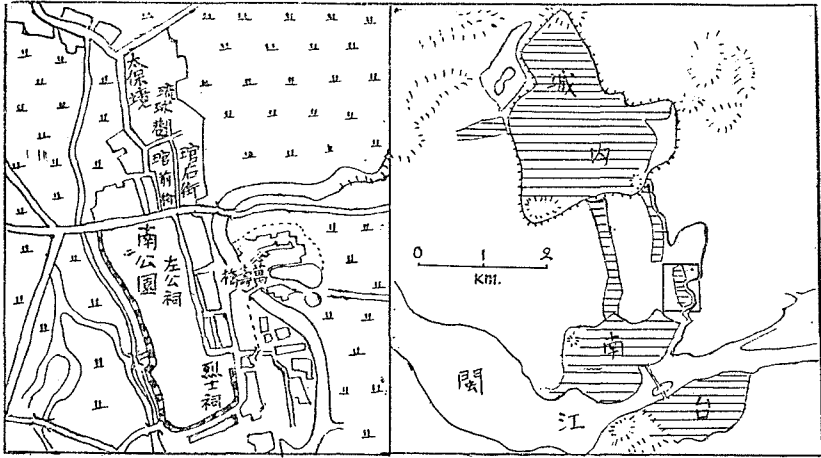
明は初め市船司を太倉黃渡に設けたが京師に近いと云ふので之を廢め、福建(泉州)浙江(寧波)廣東(廣州)に置いた。洪武七年には、この三市船司をも廢めたが永寧元年再置した。「天下郡國利病書」福建の條によれば、明初立市船司。七年仍復之。爲琉球入貢。其國與泉之澎湖山直。而受貢於比。……後番舶入貢多抵福州河口。因朝陽通事三十六姓其先皆河口人也。故就乎比。とある。即ち一度廢した泉州市船司を再置したのは琉球の入貢の爲で、その國は泉州港外澎湖島から直航されると云ふのである。嚴密には琉球の港那覇は泉州より約一度緯

度が高いのでその航路は眞西に進む事はできぬ。福建市船司が泉州に置かれたのは勿論宋元以來の傳統に従つたまで、あらう。かくて琉球の貢船は初め泉州に入港したが後次第に福州河口に行く様になつた。これは琉球人入明の水先案内であり通譯である閩人三十六姓が福州河口の産であつたからで、彼等は、入貢の序を以て、故郷の一族故知を尋ねべく、當初は泉州より福州に廻航してゐたであらうが、前述の如く泉州はその貿易港としての繁榮が衰へつゝあり、又福州は那覇と同緯度で丁度眞西に當り泉州よりも近いので旁、後には泉州に寄港する事なく福州に直航する様になつたものであらう。

二

かくて成化五年(一四六九年)福建市舶提舉司は泉州より福州に移さるゝ事となつた。そして市舶太監府を栢衙に、市舶提舉司を澳橋に、進貢廠柔遠驛を河口に設けられた。

福州の起原は遠く漢代に遡るも、晋代に郡城を築き、唐代に羅城を設け、梁代に南北夾城、宋代に東南夾城を



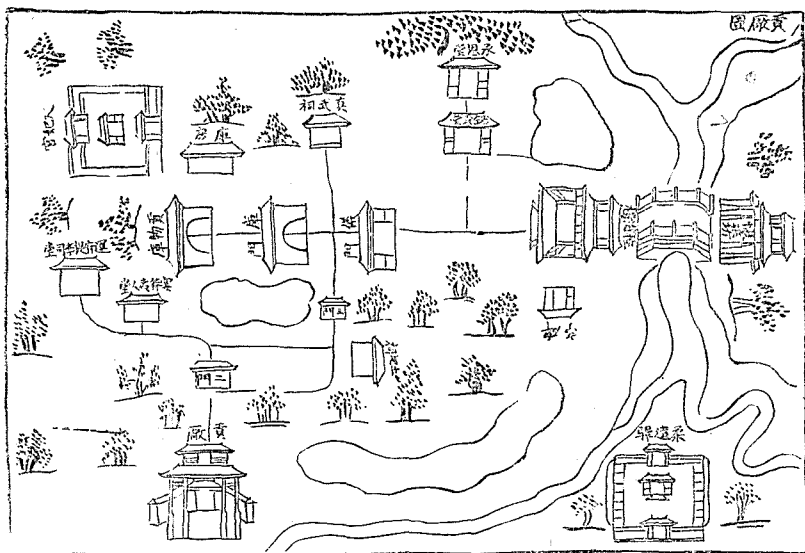
琉球館附近の現状

福州城市要圖

増置した。その後一時衰へたが明の洪武四年に宋初の規模に歸り、福建省城として繁榮に赴いた。市舶大監府、市舶提舉司は共に城内の栢衝澳橋に置かれたが進貢廠柔遠驛は城の東南水部門外河口の地に設けられた。之は外夷をして省城を窺しめざるを好まず古來諸藩貢使の館舎は必ず城外に置く慣しであるのと、河口の地は閩人三十六姓の郷土であり、且又閩江より城内に通ずる舟運の要衝に當つてゐる等の事が考慮された結果であらう。進貢廠及柔遠驛の規模は嘉靖の頃市舶提舉司の任にあつた高岐の福建市舶提舉司志に詳かである。今、その挿圖と建築物の日録とを示せば次の如くである。

進貢廠房屋

- 錫貢堂三間 會盤方物于此。承思堂三間。
- 察院 三司會宴于此。控海樓一座三間。
- 廚房一所。尙公橋一座。
- 碑亭一座。儀門三間。
- 運府提舉司會宴堂三間。待夷使宴堂三間。
- 更樓一間。守宿房五間。
- 庫內香料庫三間。椒錫庫一間。



(るよに圖附志司舉提舶市建福) 驛遠柔及廠貢進

蘇木庫三間。 硫磺庫一間共八間。

棟簷煎銷硫磺兩廡房共二十間。

庫亭一座三間。 庫門三間。

外參門一座。 武門一座。

大門一座。 門外坊牌一座

各小角門三座。

柔遠驛

前廳三間。 兩邊臥房共六間。

後廳五間。 兩邊夷稻臥房共二十七間。

武門三間。 兩邊夷稻臥房共六間。

守把千戶房兩邊共十間。

軍士房二間。 大門一間。

天妃宮一所

(細目略)

以上の如く數多の堂屋參差として相連なり、規模又見るべきものがある。進貢廠には進貢の万物を一時貯藏する諸種の倉庫が多く各品目別棟となつてゐる。柔遠驛は貢使一行の宿泊滞在の館舎である。又航海の安全を祈願する天妃宮が域内に設けられてある。

明清爭覇の混亂の間、琉球は大に困惑した。當時琉球統治の實權を握つてゐた島津藩とても、貿易の目的はその利潤にあつて、支那と事を構ふるを欲しなかつたので清朝となるや、琉球はその冊封を受けて大陸との關係を持續するに務めた。一方清廷では琉球の入貢を歓迎し、貢使の館舎としては明代の柔遠驛をその儘充當した。

「閩都記」^⑦には進貢廠在「河口尾」。琉球入貢駐泊于此。有柔遠驛。と見えてゐるが、「福州府志」^⑧には柔遠驛在水部門外。……以爲琉球諸藩國使臣館寓之所。國朝困之。とあるのみで、進貢廠の記事はない。惟ふに明初の完備せる設備はその後漸次衰頹し、清代には柔遠驛のみが保存されてあつたものではなからうか。幕末薩藩の賢主島津齊彬公は福州の柔遠驛を擴張して對支貿易の發展を企圖したと云はれるが、長年柔遠驛を獨占利用しつゝ、ある間に琉球は不知不識、それを我物顔にする様になつたらしく、又清國政府も敢て之を異としなかつた様である。

明治十二年琉球藩を廢して沖繩縣を置くこととなり、琉球と清との關係は此處に斷絶し、琉球貢使の爲に置かれて來た柔遠驛はその存立の意義を失ふ事となつた。清末の撰に係る「閩縣鄉土志」^⑩によれば、柔遠驛即琉球會館。在太保境後街。前有十家排。李姓四戶鄭宋丁下吳趙各一戶代「香球商之貢」。とある。即ち公衙であつた柔遠驛は最早、福州在住琉球人の俱樂部とも云ふべき琉球會館の名で呼ばれ、その前にある十軒長家（柔遠驛の臥房ならん）には支那商人が住んで琉球商品を賣る有様であつた。今では僅かに只一人の沖繩人眞榮平朝正氏が居られるばかりで、嘗ての柔遠驛正廳を利用して製茶工場を營まれ、臥房には支那人勞働者が數家族入つてゐる。しかし正廳西側の祠堂には、この異域に眠つた五百餘の琉球人の位牌が祀られ、正廳前庭の楠の大本と共に、ありし日の柔遠驛を物語る。筆者が訪れたのは昭和十一年八月三十日丁度陰曆の孟蘭盆に當つてゐたので、只一人の同胞によつて佛事がとり行はれてゐた。筆者も明代の遺構に係るこの祠堂に一禮した事であつた。

木造臥屋の一室で残された唯一の記録である過去帳を見せてもらふ。之には氏名歿年は勿論墓地の位置まで詳細に記されてゐる。東京府立高校の東恩納寛惇氏は先年之によつて、その先祖の墳墓を發見されたさうである。

同氏がその際集計された結果を拜借すれば墓所のあるもの四百九十人、内歸葬者十六人、墓所無きもの八十八人、福州にて客死せるもの、合計五百七十八人である。南台裏、程墓頭附近の墓地に立てば、支那人の墓に交つて大琉球國人何某の墓石を有するものが無數に見出される。

正廳正門等は最近に修築されたものであるが、門には「海不揚波」と云ふ扁額がかゝけられてある。荒海を渡つて來た貢使にとつて喜ばしい文字であらう。

門外に送られた眞榮平氏はクリーク上に架した石橋を目標して琉球貢船が彼方まで入津したと傳へらるゝ、話を話された。萬壽橋即ち之であつて、閩江本流にかゝつてゐる同名の大橋と區別する場合には小萬壽橋と呼ばれる。「重纂福建通志」^①によれば萬壽橋在河口新港。古爲

河口渡。康熙七年鼓山僧成源與里人柯應萊同募建。とあり清初の創建であるが、「福州府志」卷九の津梁の個所と照合するに前後の順序から云つて、府志の尙公橋に相當と思はれる。尙公橋は進貢廠にあり、前掲挿圖によつて案ずるに、その方角は略萬壽橋に一致する様である。(柔遠驛は南面して居るので尙公橋は驛より南方に當る。)恐らくは尙公橋が墜ちて後暫くして、その故址或は多少移動した所に新橋を架して橋名をも改めたものはなからうか。只疑問とすべきは府志は乾隆年間の撰であるから康熙に架せられた萬壽橋に就いて記すべきであるがそれが無く却つて尙公橋を擧げてゐる事で、前代の方志をその儘踏襲して誤つたものであらうか。

尙公橋は市舶提舉司志引く所の尙公橋記によれば、橋以尙公名者公所造也……(正徳)五年秋乃以都知監太監……來總閩藩船事……其懷馭島夷之朝貢者以惠……一日會盤方物于河濱。見司所架木橋度運海航諸貨登岸者。板弱繩朽遠際昏使溺焉。公慨然曰。此非所以柔遠人也。遂出粟貲分給石。公造橋。梓人樹坊

于東名曰懷遠。建樓于西名曰控海。皆極堅固壯麗。即ち正徳五年（一五一〇年）に尙公橋、懷遠坊、控海樓等が創設された。尙公橋の位置が現萬壽橋のそれと大差なしとすれば、附近一帯が即ち進貢廠の遺址である。

(一一、一一、一一)

註① 桑原鷗藏蒲壽庚の事蹟 昭和十年

② 矢野仁一 支那近代外國關係研究 二一七頁以下 昭和三年

③ 烏倉龍治・眞境名安興 沖繩一千年史 八二頁 大正一二年

④ 顧炎武 天下郡國利病書 卷九六 福建六

⑤ 高 岐 福建省舶提舉司志 明嘉靖三四年

⑥ 拙稿 福州の發達 地球二六卷 六號 昭和十一年

⑦ 王應山 閩郡記卷一三 明代の撰 道光一一年重鐫

⑧ 徐景熹等編 福州府志卷一八 乾隆三三年

⑨ 武藤長平 薩藩の琉球統治策 歴史と地理三卷 大正八年

⑩ 鄭祖庚等編 閩縣鄉土志 卷五、六 清末年

⑪ 孫爾準等修 重纂福建通志卷二九 津梁 同治六年

「後記」 矢野博士には御静養中の處を押し御校閣下され種々御教示を賜はつた。深く感謝申上ぐる次第である。